
当院腎センターにおける 死亡例・剖検例の検討

寺邑朋子、山岸 剛
秋田赤十字病院内科

Analysis of cause of death in Dialysis center of Akita Red Cross Hospital

Tomoko Teramura, Tsuyoshi Yamagishi

Department of Internal Medicine

Akita Red Cross Hospital

<緒 言>

秋田赤十字病院腎センターは昭和61年12月の開設から13年目を迎えた。この間のべ230名が当院で透析導入、あるいは他院から転入となったが、一方、74名が死亡している。今回、我々はこれら死亡例および剖検例について検討した。

<対 象>

対象は昭和62年から平成11年9月までに当院腎センターで死亡した透析患者74名である。性別は男性48名、女性26名、年齢は37～88歳（平均69.4歳）、透析期間は1ヵ月～11年4ヵ月（平均23ヵ月）であった。

<結 果>

1) 死亡例：

死亡例の原疾患は糖尿病（以下DM）が最も多く全体の40.5%、次いで慢性糸球体腎炎32.4%、腎硬化症9.5%であった。死亡原因は感染症、悪性腫瘍、心不全、脳血管障害の順に多く、これらが全体の72%を占めていた。ここ数年の死亡者数は年間7～10名程度であり、心不全が減少し、感染症と悪性腫瘍が増加している。

死亡までの透析期間は、全体の90.5%が透析導入5年未満であり、さらにこのうち90%は導入6か月未満であった。年度別にみると、近年は透析期間の長い症例が増加してきているが、導入1年未満の早期死亡例も毎年認められている。透析期間と死亡原因との関係については、透析1年未満では感染症による死亡が36.7%と多く、1～5年では脳血管障害、5年以上では悪性腫瘍の増加が目立つ。死亡原因からみると、脳血管障害は透析1～5年に集中しており、感染症は導入1年未満が半数以上を占めていた。死亡原因と原疾患については、脳血管障害は慢性腎炎に多く、心不全は糖尿病に頻度が高かった。なお、頓死も糖尿病で多かった。

2) 剖検例：

剖検を施行したのは74例中28例（37.8%）であり、このうち剖検によって死因が確定したものは6例であった。副病変として血管系では大動脈のアテローム硬化が24例に認められ、腸骨動脈や大腿動脈、腸管膜動脈のアテローム硬化、狭窄も認められた。脳の剖検が得られた例では、脳動脈硬化も認められた。心臓では左室肥大が19例、冠状動脈硬化が9例に認められた。消化管では15例に胃の出血性びらん、食道潰瘍、結腸びらんまたは潰瘍、腸管壊死などの所見を認めた。その他、甲状腺癌が2例に存在し、副甲状腺過形成は8例に認められた。

<考 察>

日本透析医学会統計調査委員会の1998年末の全国統計では透析患者の死亡原因の第1位は心不全であり、次いで感染症、脳血管障害、悪性腫瘍の順となっている。当院の死亡例の特徴として、心不全による死亡が少なく、感染症と悪性腫瘍が多いことが挙げられる。また、全国の1983年以降導入患者のうち、導入1年未満の死亡は全体の35.6%であるが、当院では40.5%と早期死亡例の割合が若干多くなっている。導入1年未満の死亡の40%弱が感染症によるものであり、導入前後の感染対策が重要と思われた。さらに、当院の死亡例の傾向として、虚血性腸炎など透析中の低血圧に関連したもの、あるいは透析時の低血圧を契機に容態が悪化したケースが比較的多く、15例が透析時の著しい血圧低下直後、または数日内に死亡している。多くはエンドステージでやむを得ないと考えられるものであるが、剖検所見で高度の動脈硬化が多数の症例で認められており、このような患者では血圧低下は容易に虚血性病変を引き起こすことを念頭において、より慎重な血圧管理が必要であると考えられた。

<結 語>

当院腎センター死亡例74例について検討した。当院の死亡例では感染症と悪性腫瘍が多く、透析導入1年未満のものが多かった。74例中28例で剖検を行い、高度の動脈硬化が特徴的であった。